



Title	<書評>Ron Eyerman (著) 『Is This America?: Katrina as cultural trauma』
Author(s)	大門, 大朗
Citation	災害と共生. 2022, 5(2), p. 25-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86909
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Ron Eyerman (著) 『Is This America?: Katrina as cultural trauma』
University of Texas Press, 2015年9月刊, 183頁

大門大朗^{1,2}

Hiroaki Daimon

1. 「東日本大震災」というけれど

良くも悪くも、わたしたちは被災地に行くことなく、すでに東日本大震災にまつわる悲しみや痛みを知ってしまっている。「東日本大震災を機に……」、「東日本大震災を忘れない……」、東日本大震災、あるいは、あの震災、というとき、日本に住むわたしたちは、津波が街を襲う様子だとか、原発が爆発する様子だとか、被災者が震災を語る様子だとかを想起しながら、なんとなくではあれども、その災害をイメージすることができる。しかし、それほど「東日本大震災」は自明なのか。なぜ具体的な土地や人を知らずに東日本大震災を語るすることができるのか。それはなぜか。

もちろん、「東日本大震災」が自明ではないかもしれない、と言われても、「2011年3月11日に起こったあの地震津波がなかったとでも言うのだろうか」と思われる人もいるかもしれない。評者としても、あの地震・津波が存在しなかったとか、震災を軽んじようとかそういう意図があるわけではない。しかし、熊本地震、広島土砂災害、西日本豪雨……そうした災害とは違う形で、東日本大震災は常に何度も参照される。具体的な土地や人に結び付けられることを離れてもその災害について名指すことができる例外的な災害ではないだろうか。

ここでは、災害を表象する2つの水準を導入することで、理解の補助線としてみたい。第一の水準は、ハザードによって引き起こされた被害や実際に現地の人々が体験するローカルな経験と切り離すことのできない災害の表象である。「トラウマ」という表現を本書に即して表現するとすれば、それは、エリクソン（1976 宮前・大門・高原訳 2021）のいう個別的トラウマや集合的トラウマといったローカルなレベルでの災害の表象である。そして、第二の水準は——これがアイヤーマンの主張であるわけだが——被害や現地、個人といった固有名詞抜きで描かれ、語られ、意味づけられ、流通していく災害の表象である。アイヤーマンは、このナショナルなレベ

ルで想起される災害を「文化的トラウマ」として区別している。

ここで評者が述べていたのは、第二の水準の意味での「東日本大震災」について問い直してみたいということである。別の言い方をすれば、津々浦々被災地を歩いたわけでも、様々な被災者の話を聞いたわけでもないのに、2011年3月11日に起きたあの災害が「東日本大震災」として語られることにわたしたちは違和感を覚えないのか。踏み込んで言えば、具体的な被災地抜きに、被災者抜きに、あらゆる被害や出来事を想起する参照点として「東日本大震災」という表象が機能しうるのはなぜか。

これから紹介する『Is this America?』は、被災地、被災者、現地の経験（第一の水準）とは因果関係を明瞭に持たない形で語りうる——被災地、被災者、現地抜きに——（第二の水準で語られる）災害について、考察を行った書である。具体的には、2005年8月末にアメリカを襲った「カトリーナ」が、一体アメリカ社会に、どういう影響をもたらし、どういう意味を持ちえたのか、集合的記憶に刻まれた傷を——第一の水準である固有の経験を全くといっていいほど持ち出さずに——文化的トラウマとして描き出した書である。そして、本書は、日本の人々が東日本大震災について語るときと同じように、米国の人々がカトリーナについて語るとき、それにどういう社会的な意味が動員されているのかを考える一つの視座を照らし出すものである。

2. 「カトリーナ」とは何だったのか

ハリケーン・カトリーナは、2005年8月末にかけてアメリカ南東部を襲ったハリケーンである。8月28日には、ハリケーンの強さを表すサファ・シンプソンスケールで最大の5、最大風速は175mph（時速約280km）となり、ニューオーリンズ市長のレイ・ナジンは、市全土に避難命令を発出した。カトリーナはその後、ルイジアナ州に上陸し、南東部を中心として大きな被害を出した。公的な記録によれば、米国

*1 京都大学防災研究所 日本学術振興会国際競争力強化研究員（CPD）・博士（人間科学）
Research Fellow (CPD), Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University. Dr. Human Sciences.

*2 デラウェア大学災害研究センター 客員研究員
Visiting Scholar, Disaster Research Center, University of Delaware.

史上3番目に多い死者1,836人、被害総額は800～1200億ドルに上ると言われている……云々。

しかし、本書が焦点を合わせるポイントは、そうしたカトリーナというハリケーンのプロフィールとか、被害の事実が「何だったか」という点ではなく、それが大衆に向けて、どう描かれ、語られ、意味づけられ、そして流通していったのか、という点である。著者のアイヤーマンは、カトリーナがどのような形で大衆に紹介されたか、ある種の代表的な語りとして自身の表現で示している。少し長くなるが引用しよう。

災害は、大惨事^{カタストロフィ}となりました。街のインフラは崩壊し始め、電気や水道は使えなくなり、ガス管は破裂し、街に取り残された10万人を超す人々のための非常食や水、医療用品は嘆かわしいほどに不足していました。避難バスは来るはずのところにはやって来ず、自力で避難できない人々の頼みの綱のスーパードームも、避難所であるのに、目を覆いたくなるようなスペースと物資しかない有様でした。聞くとところだと、少なくない警官が自分の家族の救助にまわったり、他の人と一緒に避難したそうで、この街に「警察」と呼べるものははやないようです。そういうこともあり、暴力や略奪などの犯罪めいた話は瞬く間に広がって、マスメディアを通して拡散していくのでした。市長をはじめとする地元の有力者たちは、真つ暗になった市街地のホテルに閉じこもって助けを求め、市の新聞社も支援者たちを募っていました。このあたりの人が書いたネット記事は違うと言っているかもしれませんが、ニューオーリンズは大混乱に陥っていたのです。国や地方自治体の当局は、どうしたらよいかわからず、何も決めきれていないように見えました。連邦政府は、他のことに気をもんでいるのか、どう対応すべきか何もわかっていないようでした。この国の安全に対する最終的な責任者である大統領は、ぼんやりと飛行機の窓からどこか遠くを眺めているかのようでした。この世で一番の大国であるはずのアメリカは、国民の分かりきったニーズに応えることができないで、麻痺しているかのようでした。そして、こうした様子は、テレビを介して全世界へ向けて発信されたのです。はじめは、ある地域の災害でしかなかったカトリーナも、今や世界的に重要な関心事となったのでした。(pp.122-123、以下本文から

の引用はすべて評者訳)

新聞記事の一面には、救出された白人たちを写したナインス・ワードと、徒歩で避難所へ向かっている黒人たちを写したセント・バーナードの違いが救助の様子として新聞紙を飾った。ニューオーリンズ市街に取り残され、スーパードームに避難していた黒人や貧困層が画面越しに何度も映し出される。なぜ彼らが取り残されたのか。どうして社会階級によって、避難の程度が違うのか。ニューヨーク・タイムズは、かれらを「難民」と、地元紙のタイムズ・ピカユーンはニューオーリンズを「ヒロシマ」とそこがあたかも海外の戦地であるかのように報道した。CNNのレポーター、アンダーソン・クーパーは、街中をボートで移動し、車の上で溺死した黒人男性の遺体を指しながら、救助の必要性と現場の惨状を訴えた。ハリケーンの接近中、テキサスで保養していたブッシュ大統領は、カジュアルな姿で空港に降り立った。彼は、9/11の時とは違い安全面を考慮しスーパードームには立ち寄らず、少し日焼けした面持ちで、テレビメディアにこう言った。「みんなで金を送りましょう」。イラク戦争に派遣されていたルイジアナ州兵、テロとの戦いによって洪水を防ぐ堤防の予算が削られていたルイジアナ州。誰が指揮を執り、責任を取り、資金を提供するのか。今や、政府とルイジアナ州・ニューオーリンズ市の対立は、共和党と民主党の派閥政治の問題となった。NBCのレポーターのマーク・サヴェーージュはこう述べている「ここはソマリアではありません。イラクでもありません。ここは我が国なのです」(p.92)。

カトリーナは確かに大きな被害をもたらした。しかしそれ以上に、年齢、人種差別、社会階級、ジェンダー、そうした目に見えないアメリカの亀裂を明示化させる触媒となったという点で他のハリケーンや災害と異なる位置を占めた。そして、その苦しみや痛みがメディアを通して語られることによってアメリカの想像の共同体、集合的アイデンティティにトラウマ^{トラウマ}をもたらしたのである。

本書のタイトルでもある「これがアメリカなのだろうか？(Is this America?)」とは、その後のカトリーナに関するメディア報道や議論の中で、頻繁に用いられた言葉であった。「国の恥」、「国の悲劇」、「国の恥辱disgrace」、あるいは、「政府による洪水」、「社会災害」、そして、通常、国外の人にししか使わない「難民」といった言葉に代表されるように、カトリーナが指す災害は、単なる自然災害のカトリー

ナ以上のものになっていった。

カトリナは、その被害の大きさだけでなく、それが経験され、理解され、解釈されたあり方によって特別なものだったのです。この偉大な国に大きな恥をかかせた、あまりにひどい政府の失敗がその後に続く、前例の無い、想定外の自然災害として名を刻んだのです。(pp.6-7)

3. 文化的トラウマ

アイヤーマンは、ローカルな災害を超えたレベルで、意味やアイデンティティに関わるこの種の強力な感情を「文化的トラウマ」⁽¹⁾として概念化している。

文化的トラウマとは、集合的な痛みと苦しみの大衆内のアーティキュレーションであり、それは、言葉、音、イメージを通じた表象と同様に、それらを構築し、コミュニケーションさせる利害関係者を必要とするものである。(p.8)

しかし、もっとも重要だと思われるのが、この文化的トラウマと、実際に現地の人々が経験する個別的・集合的トラウマとは因果関係はないとしている点である。

私見に基づけば、個人や集団がひどく苦しむこととなるトラウマ的な事案と、文化的トラウマの間に、必要とされる因果関係はない。(p.7)

評者なりの言葉でいえば、文化的トラウマとは、固有名詞抜きの災害であり、そして、それが流通可能になるプロセスや語りのあり方をさしている。言い換えれば、文化的トラウマの形成には、現地で苦しむ人や集団、地域というのは、あくまで、二次的な要素にとどまっている。むしろ重要なのは、その、トラウマティックな事象が、外部の人々へ向けて、どう喚起され、広げられていくかという点である。例えば、自然災害としてのカトリナは、現地の被害ではなく社会の災害として語られた。現地の救出・救助というよりもブッシュ第2次政権の「政治的テスト」として、堤防の不備やルイジアナ州兵のイラク派遣は、9/11後の危機管理上の政策の問題として、被災集団やスーパードームでの窮状は現地の状況を伝えるものというよりも、アメリカの人種差別と貧困問題として発信されたように。

アイヤーマンは、(2005年8月末にアメリカ南東部を襲った)ハリケーンそのものと、それが災害として語り直されるプロセスを分けるために、トラウマ

ティックな事象traumatic occurrenceという概念を導入している。そして、このトラウマティックな事象(ハリケーンそのもの)が、どのように文化的トラウマ(いわゆる「カトリナ」)として形成されていくのかに注意を向ける。そして、その状況を定義していく媒介集団carrier groupに目を向けるよう注意を促す。

文化的トラウマを形作るとは、私がこれから媒介集団と呼ぶ、アクターや仲介者が関わるプロセスを指している。そして、かれらは、多様な理由をもって、トラウマの語りを形作る役割を担っている。(p.9)

この媒介グループには、ジャーナリストや新聞記者といったメディア関係者だけでなく、大統領や知事などの政治家、エンジニアやアカデミアなどの専門家、さらには、アフリカン・アメリカンの知識人、宗教指導者、アーティストなど、様々なアクターが含まれる。そして、単なるカトリナというハリケーンが(トラウマティックな事象や事件が)それ以上の社会的な災害として語られていく(語らなくなる)までのプロセスを追うことが、文化的トラウマを描き出す重要なポイントであるという。

4. カトリナという文化的トラウマ

アイヤーマンは本書において、活字メディア、アート、テレビメディアの媒介集団によって、カトリナが文化的トラウマとして表象されていく過程を丁寧に追っている。詳細は本書に譲るとして、ここでは、アイヤーマンが提示した3つの結論を紹介したいと思う。カトリナは、アメリカ社会に何をもたらし、どういう災害として位置づけられたのか。

第一に、カトリナは、語りの領域の境界を壊したという。例えば、中心的な立場のマスメディアの語りにおいても、第三者の立ち位置を維持した現場の報告というあり方は、声のトーンや感情的・政治的な語り口を交え、視聴者とコミュニケーションするあり方(例えば、CNNでは、行方不明の家族を探す媒介としてテレビを用いた)に転換したという(これは、東日本大震災以後の日本の報道のあり方、避難情報の出し方とも部分的に重なる)。そして、それは、現実を超えた現実——超現実が、カトリナによってもたらされていたことを伝えるために発明された報道のあり方であった。そして、それはイメージや経験が視聴者の認識の境界を破るという古典的なトラウマの定義(c.f., フロイト、カルース)と

類比的な形で、それが異常な事態であることを喚起する効果を持ち、文化的トラウマの形成を促したと分析している。

第二に、カトリーナは、アメリカの集合性——想像の共同体、ネーション——に亀裂をもたらしたというものである。人種差別の露呈、貧困層（特に黒人、女性・こども、高齢者）への被害の集中、「国の悲劇」「国の恥」「これがアメリカなのだろうか？」といった言説に現れているように、カトリーナはすでにあった不平等や差別を顕在化させる触媒となった。そして、それは、9/11と対比される形で、語り直された。金融・世界の中心であるニューヨークとは違い、ニューオーリンズは周辺性を強く帯びていた。さらに、ニューオーリンズが文化的な都市であったことが、アートによる語りの形成を後押ししていく。音楽（e.g., モス・デフ「Dollar Day」）が政治への批判の意図を帯びて歌いなおされたこと、破壊された中にある美（e.g., サンダスキー）と道徳的・政治的なメッセージの必要性（e.g., ベイツ）との間の葛藤という形で美術にも大きな影響をもたらした。

最後の結論は、カトリーナがアメリカの集合的記憶となったというものである。カトリーナは、「ひどい嵐」というよりも、社会的災害・社会的カストロフであった。しかし、そのあり方は、カトリーナ以後極めてよく対比されていた「9/11」とは大きく違うものだという。9/11は、全く想定外のテロによる、国の外部からの攻撃であった。一方で、カトリーナは、国が何度も経験しているハリケーンによる、国の内部の亀裂にその原因を探らねばならない。9/11は、テロによる攻撃によって、集合的アイデンティティは傷つけられたというよりも、強化された。しかし、カトリーナは、この国が亀裂に満ちていることを表出させたのである。言い換えれば、カトリーナは、集合的アイデンティティを毀損させた——これがアメリカなのだろうか？——のである。

5. 文化的トラウマの奇妙な分離と東日本大震災

文化的トラウマを形成してしまうような第二の水準で表象される災害——固有名詞抜きで語りうる災害——を他国から理解するのが難しい理由はそのにある。ハリケーンそのものの科学的情報や物理的被害、ハリケーンによる被災者や被災地をつぶさに観察したとしても、そこに文化的トラウマを発見することはできないからである。その社会において捉えられ、形作られた意味を理解するには、どういう媒介集団が、そのトラウマティックな事象を語ってい

ったのかに着目しないといけない。

そして、これは逆の問いとしても当てはまる。どのような文化的トラウマのレンズをもって、日本にいるわれわれは東日本大震災を眺めているのだろうか。実際、ある意味で、わたしたちは、東日本大震災の被災地に行く前から、被災地をよく知っている。しかし、そうした状況こそが、文化的トラウマの語りが形成されていることを暗に示している。

本節からは、蛇足ながら、文化的トラウマとしての東日本大震災について、いくつかの例を挙げて試論的に考えてみたい。

象徴的には、政治家や国のレベルで、東日本大震災は何度も想起されている。「福島を再生なくして日本の再生なし」（当時の野田総理大臣）、「東北の復興なくして日本の再生なし」（当時の安倍総理、現岸田総理）といったスローガンをはじめ、10年期限の復興庁や復興税など、東日本大震災は、政治的言説においても、制度的・法的意味でもナショナルな位置づけを保っている。

また、メディアにおいても、被災地はボランティアや支援、復興の対象となり、そして、忘れてはならないものとして語られている。現在でも、報道では様々な周年に合わせて、「忘れない」あるいは「忘れてはならない」といった更に強い口調のものまで様々見られる。そして、その特徴の一つは、現地の人々が用いない言葉が、新聞やテレビなどのメディアで流通している点である。河北新報の記者であった寺島（2021）が「東日本大震災での筆者の取材経験を振り返ると、『復興』という言葉が被災地の人々から聴いた覚えがない」（p.140）と述べているように、メディアの語りは、現地の日常の会話とはかけ離れた奇妙な形で語り直されている。

大学関係者や専門家集団らも、その任を多方面に担っていると言えよう。内閣府を中心として出された、南海トラフ巨大地震のいわゆる「新想定」は、「あらゆる可能性を考慮した最大クラスの巨大な地震・津波を検討していくべきである」という東日本大震災の反省を踏まえた形で、極めて巨大な津波（L2）想定として出されている。だが、それと同時に、地震の推計に関しては、予測は極めて難しいという科学の限界も新想定では言及されている。紙幅の都合上、原発事故の問題、防災意識や避難行動に関わる研究の増加、「想定外を想定する」といった言説、教訓や記憶の語り継ぎや伝承、科学への過度な信頼への批判など様々に採り上げたい論点はある

が、ここでは、大学関係者や専門家集団らが、東日本大震災の語りを構成する重要な役割を担っている点を指摘するにとどめておく。

6. アートと仮構

次に、文化的トラウマにもう少し踏み込む上で、東日本大震災後のアートについて採り上げたい。それは、別の視座から、一つのヒントを提示してくれるように思われるからである。ここでは、歌（「花は咲く」）、ミュージアム、映像・アート作品を採り上げ、東日本大震災を文化的トラウマとして捉える上での一つの切り口を提示してみたい。

最初に、東日本大震災以後に歌われた「花は咲く」の歌詞について採り上げる。「花は咲く」の歌詞は、「今はただ なつかしい あの人を 思い出す」「いつか生まれる君に 花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に」といった、過去への眼差しとともに、何度も花が咲くという表現に込められた回帰的な時間感覚を見て取ることができる。この「花は咲く」の歌詞は、阪神・淡路大震災後に歌われた「しあわせ運べるように」を比べてみると極めて対照的である。「しあわせ運べるように」の歌詞には、「亡くなった方々のぶんも 毎日を大切に生きていこう」、「生まれ変わる神戸のまちに」といった歌詞が登場するが、それは、復興に向かう単線的・直線的な時間感覚であり、復興へ向かう神戸のまちを担う大きな主体を想起させるものである。一方、「花は咲く」の歌詞で回想されるのは、「あの街」「あの人」「あの日々」といった不明確な冠詞付きの対象であり、「いつか生まれる君にそれを託す」といった代名詞に見られるように、「しあわせ運べるように」と比べると、そこに名指される対象も主体も極めてぼんやりとしており多義的である。「花は咲く」の歌詞には、想起される場や主体の未決定性や多義性の余白が強く残されている。

もう一つの切り口は、東日本大震災以後に建設された陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館」の展示に見出すことができる。東日本大震災津波伝承館は、隈研吾氏による設計で、高田松原があった跡地に東日本大震災以後に建てられた、被災地の中でも最も大規模なミュージアムである。しかし、それ以上に興味深いのはその展示内容である。例えば、ゾーン3には、複数のモニターに様々な被災地が映し出された東日本大震災直後の政府の災害対策室が再現されている。また、展示物も巨大な消防車といった遺構から震災時の教訓まで、東北沿岸各地のものが

丁寧に配列されているが、一方で、陸前高田市ローカルのものを探すのは極めて困難である。災害対策室のモニターに象徴的に現れているように、そこでは陸前高田市にいるというよりも、東日本大震災の被災地全域にいるかのような、あるいは、被災地全土を一点から見渡しているかのような構成になっている。

こうした展示内容を比較する上で、気仙沼市にある「リアス・アーク美術館」は好対照である。このミュージアムは、もともと震災前からあったものであるが、震災を機に、学芸員それぞれが集めた被災物（あえて「ガレキ」ではなくそう呼ばれている）が展示されるようになった。展示された被災物それぞれに説明がつけられていて、そこに置かれた来歴やその被災物の物語が記載されている。だが、興味深いのは、その説明文は全て、学芸員による創作で、事実ではないのだという。被災物以外は、全て虚構なのである。

この2つのミュージアムの事例は、被災地の語りを考える上での2つの緊張関係を示している。ナショナルなレベルでの想起を担う東日本大震災津波伝承館は、科学的事実を重視して、鳥瞰的・俯瞰的な立場を維持しようとしている。他方で、リアス・アーク美術館の展示は、そこに刻まれていた人々の日常を空想によって、保持することに目が向けられている。そして、興味深いのは、ナショナルな展示に対抗しているのは、事実に基づく被災住民それぞれの記憶や物語ではなく、虚構や作話という点である。

この仮構的な要素は、リアス・アーク美術館の例だけでなく、東日本大震災後のアート作品の中に様々な形で観察することができる。例えば、アーティストの小森はるかとは瀬尾夏美は、埋め立てられ、嵩上げされる陸前高田の街と、その下にある元あった街を描いた「波のした、土のうえ」という映画作品を制作している。興味深いのは、小森と瀬尾は、その住民のエピソードに基づきながらも、小森と瀬尾自らスクリプトを作成し、それを陸前高田の住民読み上げてもらっているという点である。住民の方がどうしても読めない部分を手直ししながら、映画は撮られたということであるが、それは、小森と瀬尾の創作によって生まれた物語である。

こうした例を他にも挙げておこう。アーティストの加藤翼は、「引き興し」という風変わりな参加型のアート活動を2011年4月より定期的に行っている。例えば、福島県いわき市で行われた「The Lighthouses - 11.3 project」では、住民合わせ500人近い人が参加

し、地面に横たえられた巨大な作品を、参加者が一緒にあってロープで引っ張り上げるという試みがなされた。そして、この引っ張り上げた作品は、流出した平豊間地区のシンボルの塩屋崎灯台を模したものであった。それは灯台を取り戻す試みでもなければ、無くなったものに思いをはせる試みでもなく、灯台を模した作品を住民で引っ張り上げる試みであった。また、宮前（2020）は、宮城県仙台市荒浜地区に、ニセのバス停があることを紹介している。これは、実際にバスが到着することが無いバス停である。しかし、それは、昔そこにあった砂浜に泳ぎに行ったことを思い出すためのよすがとして、それが偽物であるかという事実性以上の意味を帯びていると宮前（2020）は指摘している。

東日本大震災という文化的トラウマの一つのダイナミクスは、テレビや新聞、政治家や学者が語る「復興」に代表されるような被災地の住民が語らない言葉や表現と、それに抗うかのように無いものをあるとする作話・仮構的な取り組みによる表現の拮抗として特徴づけられるようにも思われる。前者が、語ることで本当のことがウソになってしまうような（本当のようなウソっぽい）話であるとするなら、後者は、ウソとして語ることで本当らしくみえる（ウソのような本当めいた）話である。お膳立てされた中で被災者らしいコメントを求められる語りが虚構なのか、そもそも虚構として作られた話が虚構なのだろうか。そこで作られていく文化的トラウマについて一つ言えることがあるとすれば、誰一人として特権的な立場から東日本大震災について真実を語ることができないということである。そしてそれは翻って、無理に語らなくても良いし、無理に聞き出してはならないという、被災したそれぞれの人々の経験の領域を囲い直す防御膜を生成しているようにも思われる。

7. おわりに

東日本大震災という文化的トラウマの語りのディコースをここで全て追う余裕はない。しかし、「復興」や「忘れない」といった形で東日本大震災に関する語りが横溢する中で、それに並行する形で、虚構・仮構を介したアートらの取り組みはそこに対抗的な言説・表現空間を生み出している。言い換えれば、全て記録し尽くそうとする無尽蔵な記録（アーカイブ）の取り組みと、被災者の私的な領域を確保するための余剰を維持するための取り組みの拮抗が東日本大震災の一つの文化的トラウマを形成する語

りなのではないだろうか。東日本大震災を見つめる一つの文化的トラウマの語られ方は、復興や再生、あるいは忘れてはならないといった語りの繰り返しと、それが踏みにじってしまいかねない私的な被災経験を守るための虚構・仮構の間に横たわっているのではないだろうか。

その判断は読者に委ねるとしても、本書は、第一の水準に横たわる人々の固有の経験とは全く異なる、第二の水準で表象される災害の語りのあり方を追跡する上で重要な事例を提供してくれている。そして、2011年3月11日以後、どのような語り方によって東日本大震災という文化的トラウマを形作ったのかを見つめ直すための一つの視座を提示してくれるのではないだろうか。そして、それは、固有名詞抜きで語られる東日本大震災がその後の社会へ与える影響を考察する足がかりを与えるだけでなく、置き去りにされているものに目を向けさせるきっかけを与えてくれるであろう。

補注

(1)ここでいう「外傷（トラウマ）」は、医学的、心理的なものというよりも、集合的、社会的なものである。アイヤーマンは、外傷（トラウマ）は共同性を破壊すると同時に、共同性を生み出すという Erikson (1995) の定義を引き継ぎながら (c.f., Erikson 1976 宮前・大門・高原訳 2021)、一方で、災害そのものを外傷（トラウマ）と混同する個別的、集合的、国民的トラウマのあり方を批判している。なぜなら、災害そのものは根源的に外傷（トラウマ）的ではないからである。単なる嵐は、それ自体では嵐でしかない。それが、嵐以上のもの、つまり災害になるには、外傷（トラウマ）として語られる narrating trauma あり方に深く関わっているからである。

参考文献

- Erikson, K. (1995). *A new species of trouble: The human experience of modern disasters*. New York: WW Norton & Company.
- Erikson, K. (1976). *Everything in Its Path: Destruction of Community in the Buffalo Creek Flood*. New York: Simon & Schuster.
- （宮前良平・大門大朗・高原耕平（訳）（2021）．そこにすべてがあった バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学 夕書房）
- 宮前良平（2020）．復興のための記憶論 野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー 大阪大学出版会
- 寺島英弥（2021）．被災地のジャーナリズム：東日本大震災 10 年「寄り添う」の意味を求めて 明石書店